

山口県立美術館ニュース

天花

TENGE

第79号

平成13年1月15日
発行山口県立美術館



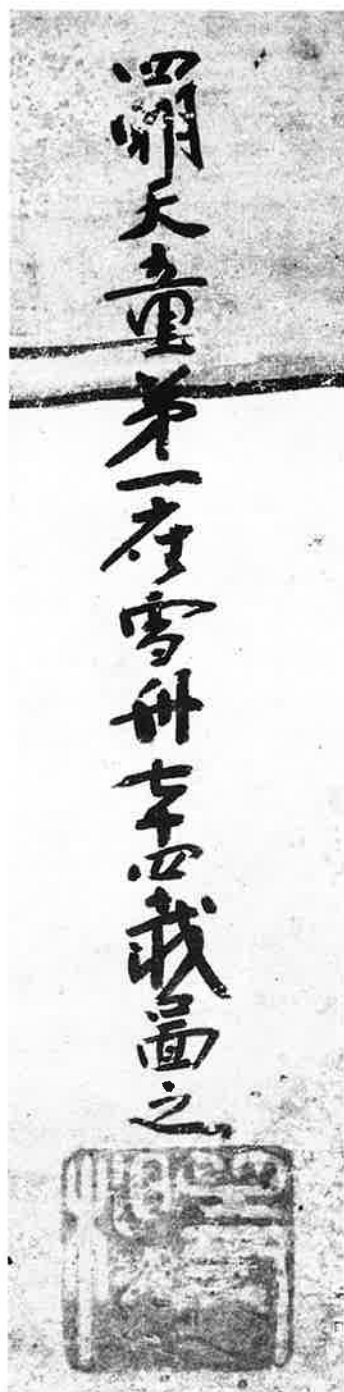
(伝) 雪舟等楊「束帯天神像」

表紙作品解説

(伝)雪舟等楊

束帯天神像

紙本彩色・掛幅装 102.0×47.5 cm



雪舟等楊(一四二〇〜一五〇六)による束帯天神像。雪舟の天神像の作例としては、岡山県立美術館に所蔵される「渡唐天神像」とともに、もつともすぐれた出来映えを示す。ただし、その表現にはいくつか問題とされるべき点が見られる。天神の顔の描き方はさほど丁寧とはいえないし、衣紋線の引き方はどこちなく、筆捌きも悪い。一方、天神の左肩の手前に重なる松樹の幹の輪廓に用いられる濃墨線の震えや、腰に佩びる太刀の鍔や柄の部分に見られるチヨコチヨコとした筆遣いには、雪舟らしさが窺われる。さらに、画面左下に書された「四明天童第一座雪舟七十四歳圖之」という款署も、雪舟らしい書体によって記されている。款署の下には白文の「等楊」印が捺されるが、後世の手が入っているようで、基準印との比較は困難な状態である。

款署によれば、本図は雪舟七十四歳の年、つまり明応二年(一四九三)に描かれたことになる。この時期に描かれたことが款署によって確かめられる雪舟の作品として、明応四年(一四九五)の「破墨山

水図」(東京国立博物館及び明応五年(一四九六)の「慧可断臂図」(齋年寺)があげられる。後者の款署には「四明天童第一座雪舟行年七十七歳謹圖之」とあり、その字句の用い方は本図の款署に近い。また、その書体においても本図と「慧可断臂図」の款署はきわめて近い。「慧可断臂図」の款署については、擬議を表している研究者もあり、いまだに完全な雪舟筆とのコンセンサスが得られていないが、私は雪舟自身の筆になるものと思っており、さらにこの「束帯天神像」の款署も雪舟自筆の可能性が考えられるべきものと判断している。肥瘦の少ない、いかにも「癩の強い」線が、雪舟の山水図に描かれる岩の輪廓などに見られる線との同質性を強く感じさせるからである。本図においてもつとも雪舟らしい部分の一つが、この款署であると私は思う。

ただし、本図の款署の中の「雪舟」の「舟」の字の第三筆画には、はねが見られない。現在雪舟の基準的な作品、あるいはきわめて忠実な模本として認知されている作品の款署にこのような例は全くない。検討が必要な問題である。

この款署が雪舟のもの認められるならば、天神の衣紋線に見られるぎこちなさも、「慧可断臂図」との比較によってある程度まで許容されるものとなるのではなからうか。「慧可断臂図」の慧可の衣紋線にも、本図に見られるようなぎこちなさが見られるからである。また、天神の顔貌表現における簡略さは、本図のような束帯天神像がある程度量産されるものであったという事情によって説明可能であるように思われる。

東京芸術大学所蔵の常信縮図に、本図と同図様・同落款の一図が写されている。その留書には「貞三六月初日紙」と記されており、本図の図様の成立年の下限の目安を、貞享三年(一六八六)としてよいだろう。また同図様の作例として、「益田信世氏所蔵品入札」(大正十三年十月二十七日)に載る一図がある。

本図は現在では雪舟真筆とのコンセンサスを得ておらず、「忠実な模本」と見る向きが多い。改めてより多くの批判的検討が加えられることを望みたい。

(荏開津通彦 当館学芸員)

陰翳礼讃

IN

EI

RAI

SAN

フランスの現代写真

2001年1月9日[火]—1月28日[日]

ジャン＝クロード・ルマニーの視点
Eyes of Jean-Claude Lemagny

山口県立美術館

このたびの展覧会『陰翳礼讃』展は、フランス国立図書館を世界最大級の写真コレクションシジョンへと導いた伝説のキュレーター、ジャンリクロード・ルマニー氏によって企画されたものです。フランス人写真家あるいはフランスを拠点として活躍する写真家三十人（日本人写真家五人を含む）の写真一五〇点によって構成されています。

『陰翳礼讃』といえは、すぐに谷崎潤一郎の随筆『陰翳礼讃』を、そして、この展覧会をフランス人が企画したと知るなら次のような一節を思い浮かべる方もいらっしゃるでしょう。

もし、日本座敷をひとつの墨絵に喩えるなら、障子は墨絵の最も淡い部分であり、床の間は最も濃い部分である。…（中略）…そこには、これと云つて特別なしつらえがあるのではない。…（中略）…にも拘らず、われらは落崖のうしろや、花活の周囲や、違い棚の下などを眺めている間を眺めて…（中略）…永劫不変の閑寂がその暗がりを通して感じられる。思うに西洋人の云つ「東洋の神秘」とは、かくの如き暗がりを持つ不気味な静かさをさすのであろう。

（谷崎潤一郎『陰翳礼讃』）

とはいえ、この展覧会が、古風な日本座敷の佇まいに、あるいは神韻縹渺たる一幅の墨画に見られる「東洋の神秘」に魅せられた「西洋人」写真家たちの展覧会であるというわけではありません。

なぜ『陰翳礼讃』なのでしょう。ルマニー氏自身の言葉を聞いてみましょう。

今回の展覧会では、現代の写真家の数多くの作品の中から、空間全体を浸しているような、広がっているような『影』、深みと広がりがあり空間を占めている『影』をそのテーマとして選ぶことにしました。

ここでの影とは、いわゆる『投影』—光が物にあたって、その物が作る影が平面にできる—そこに投げかけられた影、投射された影ではありません。また、『本影』—物体に光が当たり、その物体の上で光と影ができて凹凸やポリウム感ができる—そういったものを構成する『影』でもありません。

それは、空間を占めている、多かれ少なかれ『厚み』あるいは密度を持った影です。影のある空間に、何か物体も見え隠れするという空間の中の影も、テーマとして選びました。

すでにお分かりのように、ルマニー氏は谷崎が和様の伝統の中に再発見した『陰翳』を、自身の写真論のなかに見出しています。つまり、「東洋の神秘」としての『陰翳』をテーマとしているのではなく、現代の写真家の作品に見出される『陰翳』、つまり投影でもなく、物体の凹凸によってできる影でもなく、空間を占めている厚みのある『陰翳』にこそ焦点をあてているのです。

通常、我々は写真という芸術ジャンルを考えると、その本質を光に、あるいは光と（光の欠如としての）影の対比にもとめがちです。無論、光がなければ写真を写すことはできませんが、ルマニー氏がその本質を『陰翳』に置いていることを考えると、このたびの展覧会は、

現代フランス写真の側面を伝えるものであると同時に、ルマニー氏が実際の写真に即して示したあらたなる写真論であると云うこともできるでしょう。

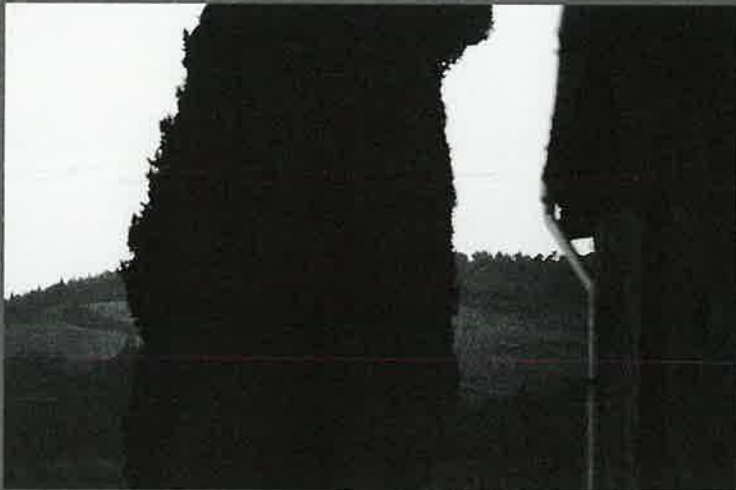
さて、それではなぜ光ではなく『陰翳』なのでしょう。

ここでも簡単にルマニー氏の言葉を引いておきましょう。彼は芸術のクオリティーは、それぞれの「マチエールの内なるもの」のなかに秘められている」と前置きした後、現実の世界の光と（光の欠如としての）影という対比は、写真においてはネガ・ポジのメカニズムを通して、欠如としての光と実体としての影に変換されるといっています。つまり、印画紙上においては、「銀塩が附着した黒い部分として、影こそが存在する」のであってこここそ「写真独自のマチエールが見出すことができる」というのです。「平面的で厚みもなく、なめらかで『マチエール』を持たない」と思われがちな写真において、実は、影こそ写真独自のマチエールが存在する。そのような観点からすれば、これはすべての写真に当てはまることなのでしょう。

それでは、再びなぜ光ではなく『陰翳』なのでしょう。

その答えは、まさしく出品作品の一点を見ていただいでわかっていただきたいと思います。ルマニー氏が選び出した写真はさまざまな影の存在を多様に示しています。ただ一言申し添えれば、ここに見られる光とは、闇を排除する光ではなく、闇に包まれ、闇から生まれてくる光であるということでしょう。

（河野通孝 当館専門研究員）



4

© Eri MAKITA Eloge de l'Ombre 2000



1

© Hiroto FUJIMOTO Eloge de l'Ombre 2000

- 1 藤本裕人(1966～)
- 2 クリスチャン・ガルザン(1949～)
- 3 ダニエル・ノナンマシェー(1961～)
- 4 蒔田恵理(1968～)
- 5 コリーヌ・フィリッピ(1944～)
- 6 白岡順(1944～)
- 7 ジャン＝フランシス・ラジェ(1957～)
- 8 ジェラルド・トロタン(1963～)
- 9/10 ヴァレリー・ブラン(1964～)
- 11 クリスチャン・サントロ(1963～)
- 12 ミレーヌ・マルベルティ(1968～)
- 13 若山和子(1968～)
- 14 アンヌ＝フランソワーズ・ブリオー(1960～)
- 15 フランソワ＝ザビエル・コンブ(1969～)
- 16 小野規(1960～)
- 17 ドミニック・フレカン(1952～)
- 18 ジャン＝ピエール・ルバス(1966～)
- 19 パトリシア・ガバス(1954～)



2

© Christian GALZIN Eloge de l'Ombre 2000



5

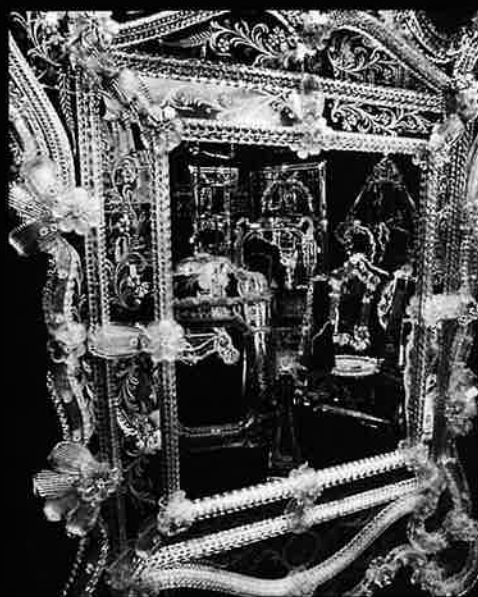
© Corinne FILIPPI Eloge de l'Ombre 2000



3 © Daniel NONNENMACHER Eloge de l'Ombre 2000



8 © Gérard TOROTIN Eloge de l'Ombre 2000



9 © Valérie BELIN Eloge de l'Ombre 2000



10 © Valérie BELIN Eloge de l'Ombre 2000



6 © Jun SHIRAOKA Eloge de l'Ombre 2000

- Hiroto FUJIMOTO (1966-) 1
- Christian GALZIN (1949-) 2
- Daniel NONNENMACHER (1961-) 3
- Eri MAKITA (1968-) 4
- Corinne FILIPPI (1944-) 5
- Jun SHIRAOKA (1944-) 6
- Jean-Francis LAGET (1957-) 7
- Gérard TOROTIN (1963-) 8
- Valérie BELIN (1964-) 9/10
- Christian SANTORO (1963-) 11
- Mylène MALBERTI (1962-) 12
- Kazuko WAKAYAMA (1968-) 13
- Anne-Françoise BRILLOT (1960-) 14
- François-Xavier COMBES (1969-) 15
- Tadashi ONO (1960-) 16
- Dominique FRAIKIN (1952-) 17
- Jean-Pierre LE BARS (1965-) 18
- Patricia GABAS (1954-) 19



7 © Jean-Francis LAGET Eloge de l'Ombre 2000



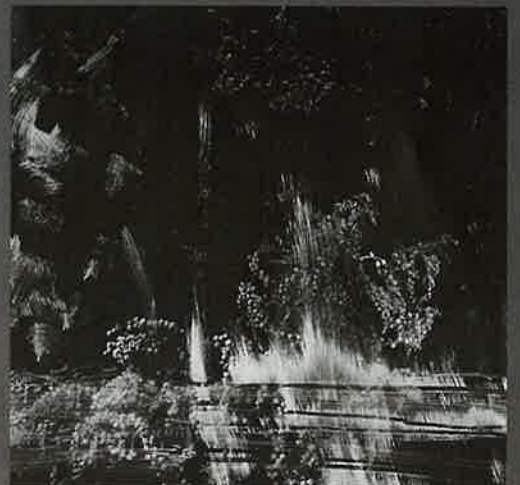
14 © Anne-Françoise BRILLOT Eloge de l'Ombre 2000



11 © Christian SANTORO Eloge de l'Ombre 2000



15 © François-Xavier COMBES Eloge de l'Ombre 2000



12 © Mylène MALBERTI Eloge de l'Ombre 2000



16 © Tadashi ONO Eloge de l'Ombre 2000



13 © Kazuko WAKAYAMA Eloge de l'Ombre 2000

ELOGE DE L'OMBRE

An Aspect of French Contemporary Photography



© Gilles EHRMANN

ジャン＝クロード・ルマニー
Jean-Claude Lemagny

1931年フランス生まれ。ソルボンヌ大学で歴史学を専攻し、1962年フランス国立図書館版画室に赴任。1968年同室写真部門の拡充を機に、現代写真部門の主席キュレーターに。以来積極的にコンテンポラリー写真作品の収集にあたり、1996年の退官まで、彼の名において同館に収蔵された作品は70,000点を越える。写真史の研究と並行して、国際的に若き才能の発掘に尽力。現在はフランス国立図書館写真部門名誉主席キュレーターの肩書きを持ちながら、インディペンデントに写真企画展に関与。日本には1991年川崎市市民ミュージアムでの「現代フランスの写真 EN LIBERTE」展のために初来日し、1995年には写真新世紀のゲスト審査員に招かれている。写真に関する著作も多い。2000年、(社)日本写真協会より「日本写真協会賞 国際賞」を受賞。『陰翳礼讃』展は彼の仕事の集大成のひとつともいえる。

陰翳礼讃 フランスの現代写真

ジャン＝クロード・ルマニーの視点

1月9日(火)～1月28日(日) *月曜休館

山口県立美術館

観覧料：一般730(620)円 / 学生510(410)円

18歳以下、70歳以上及び高等学校、
盲、聾、養護学校に在籍される方は無料
*()内は20名以上の団体料金

主催：山口県立美術館、【陰翳礼讃】展実行委員会

企画協力：KLEE INC PARIS TOKYO

協賛：A.F.A.A.(フランス芸術活動振興協会)

(株)資生堂、キャノン(株)『写真新世紀』

2000年度メセナ協議会助成認定活動

協力：東京日仏学院、関西日仏学館、(株)坂川事務所、俵屋

後援：フランス大使館、国際交流基金



17 © Dominique FRAIKIN Eloge de l'Ombre 2000



18 © Jean-Pierre LE BARS Eloge de l'Ombre 2000



19 © Patricia GABAS Eloge de l'Ombre 2000

「国宝 平等院展」を終えて

平成十二年九月二十二日から十一月五日まで開催された「開創九五〇年記念 国宝 平等院展」は、好評のうちに幕を閉じた。この展覧会は東京国立博物館で五月三十日から七月九日まで、仙台市博物館で七月二十二日から九月十日まで開催され、当館が最後の会場だったが、この全国三会場であわせて約三十万人近くの入館者を記録した。山口では、約六万人の人々が展覧会に訪れた。

この展覧会の最大の見どころは、普段鳳凰堂の高い壁面に架けられていて、間近に見ることが出来ない雲中供養菩薩52体が企画展示室の大部分を使って一堂に会したことであった。雲中供養菩薩とは、平等院鳳凰堂内の壁面に本尊阿弥陀如来坐像を囲んで、楽器を奏でたり、舞を踊ったりして供養讃嘆する極楽浄土の仏たちである。平安時代を代表する大仏師定朝一門の制作と考えられ、平安時代彫刻史上の傑作のひとつである。このうちの代表的な何体かが展覧会に出品されたことはあるが、52体すべてが展覧会に出るのは初めてのことだった。その魅力は朝日新聞「天声人語」にまで紹介されるほど評判となった。どの会場でも会期終盤にかけて、大きな入館者の伸びを見せ、多くの人々を魅了した。

雲中供養菩薩は、平等院展最大の呼びものだったが、一方で展覧会最大の難関でもあった。様々なポーズをとり、大きさの違う像を、一つ一つ梱包して輸送す

るのは、大変苦勞する作業だった。東京会場がはじまる前、ゴールデンウィークの最中に鳳凰堂の壁から降ろして点検・梱包する作業は、早朝から夜遅くまで、まる二日がかりの大仕事であった。各会場とも展示には、細心の注意を払った。

そんな苦勞をして展覧会に持ってきた雲中供養菩薩のだが、実のところこの展覧会の準備段階では「雲中供養菩薩像は、展覧会の主役として弱いのではないか」という声が強かったのである。国宝・平等院と言ってイメージされるのは、移動不可能なため出品できなかった鳳凰堂本尊阿弥陀如来像や扉絵のイメージが強く、雲中供養菩薩は、それらに比べるとやはりマイナーな印象がつきままとった。それに、雲中供養菩薩52体は、いずれも像高一メートルに満たない小像ばかりである。彩色も数体に部分的に残る程度である。いくら美術史上重要な作品とはいえ、展覧会の目玉としては影が薄くないだろうか。ポスターにしたら見劣りしないだろうか。同じようなものばかりを52体も見せられたら、見飽きてしまうのではないか。したがって、興行的にも苦しくなるのではないか。私自身も、実はこんな心配をしていた。

しかし、五月三十日、最初の会場である東京国立博物館で展示されている雲中供養菩薩を見た時、そんな懸念は、思い過ぎしだとわかった。一体一体ファイバーライト（光ファイバーケーブルを使った照明装置）によって、見事にライティングされて、薄暗い中に浮かび上がった雲中供養菩薩たちの何と見事なことか。決して52体あっても退屈するよう

なものではない。見飽きると思っていたのは、どうやら実物を知らないゆえの先入観であったようだ。雲中供養菩薩は普段高さ五メートルほどの位置に架けられていて、光は下方から差し込む外光だけで、そこでは、ほとんどシルエツトしかわからない。レプリカが数体混じって架けられていても区別が付かない。作業中には十分なライティングもされていなかったので、その表情の見事さもしつかりと見ることはできなかった。だから、なかなか実物の存在感や全体的なイメージを把握できなかったのである。

雲中供養菩薩は、実にバリエーションに富んでいる。そのバリエーションが豊かさは、単に仕草が違うだけでなく、その作風も、実に多様である。雲中供養菩薩像の制作者は、鳳凰堂本尊阿弥陀像を造った定朝の一門が、制作したものである。明治時代にかなり補修されたものもあるが、そのほとんどは、本尊と同じく天喜元年（一〇五三）に制作されたと考えられる。しかし、分担した作者の個性のためか、像の大きさ、顔立ちやプロポーションにもかなり差があり、ものによっては同じ時代のものとは思えないほどである。極めて造形的に優れたものから、それ程でもない（といっても平安時代の最高水準の作であるが）ものまで様々である。この多様さが、見ているときさせない理由なのだと思う。私もよくよく、雲中供養菩薩は、展覧会の主役として十分押し立てていけるという確信を持った。そこで、展示計画を変更し、雲中供養菩薩の展示スペースを今までプランよりも大きく場所をとることにし、な

らぶ順番も東京の展示を参考にしながら壁に掛けられている順番を無視して一体ごとじつくり見られるようなレイアウトにした。

東京・仙台的展覧会が終わり、九月中旬、山口県立美術館の展示室に雲中供養菩薩は展示された。ライティングの調整が終わり、薄暗い中に雲中供養菩薩が浮かび上がった姿はじつに感動的であった。まさに、平等院の極楽浄土の仏たちが天空から地上に舞い降りたかのように見えた。

山口での平等院展は、当初こちら側で考えていた五万人を上回る来館者があった。これは、共催（朝日新聞社、NHK山口放送局）のバックアップによるところも大きい。しかし、来館者には、この展覧会を口コミで知って見に来たという方がふだんよりもたくさんいた。雲中供養菩薩の魅力は写真や映像ではなかなか伝えられない。会期末の入館者数の急激な増加は、実物の雲中供養菩薩のすばらしさを実感して、その評判が広がっていった結果だと思う。

半年におよぶ平等院展が終わり、雲中供養菩薩たちは、平等院にまた戻った。しかし、堂内に再び架けられたのは52体のうち20体ほどである。それ以外はこの平成十三年三月にオープンする新宝物館「鳳翔館」で見ることが出来る。52体すべてを一堂に会してみるのも露出した状態で見られるのも、今回の展覧会が最後である。鳳翔館では展覧会とはまた異なった形で展示される。そのとき、雲中供養菩薩は、また新たなおもむきで見ることが出来るだろう。（岩井共一 当館学芸員）

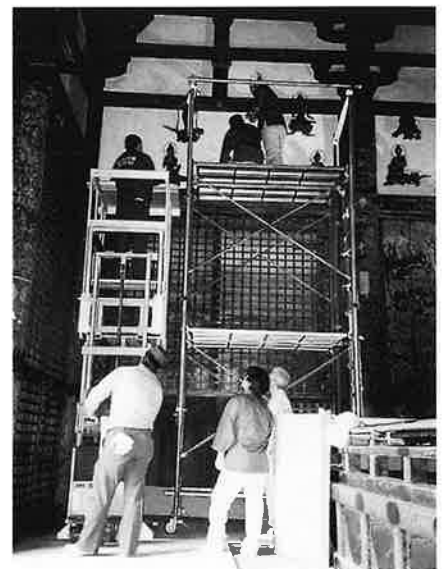


国宝 雲中供養菩薩像 北25号 ©平等院(株)PFU,1999
群像中特に優れたもので、蓮台を持つことから観音菩薩とも考えられる。院政期の仏像にもつながる優美で繊細な造形である。

会場入口には、平等院鳳凰堂外観の大きな写真を配して平等院のイメージを打ち出した。雲中供養菩薩は、ファイバーライトで上と下から照明する装置のついた展示台に取り付けた。南20号だけは展示ケース内に入れて背面も見られるようにした。(写真左上2つ。撮影筆者、以下同じ)

会場には多くの人々が訪れ、雲中供養菩薩をじっくりと見入っていた。11月3日は、教育文化週間中で無料ということもあって5000人を超える入館者があった。(写真左下2つ)

5月3日早朝から、堂内に足場を組んで雲中供養菩薩を鳳凰堂から取り外し、梱包した。作業が終了したのは翌日4日の午後10時だった。(写真右下)



ZEN-MESTARI SESSHU
 JA HÄNEN SEURAJANSA
 JAPANILAJSTA TAIDETTA 1400-1800-LUVULTA
 Helsinki Kaupungin Taidemuseo, Melahiti
 23. 8. 12. 11. 2000

渡フィンした雪舟と雲谷派

清潔でクールな街、これがフィンランドの首都ヘルシンキの印象だ。取り立てて古い町並みではないが、ギラついた感じが無い。斬新なデザインの建物も、アルバ・アアルトの建築も、普通のアパートも、当たり前のように一緒にそこにあつて、それで落ち着いている。ゴミもほとんど落ちていないし、酔っぱらつて道端で寝ている人もめつたにいない。冬は日が短く寒い。しかし雪が積もれば、街は真っ白で明るい。屋内は常に暖かくて、シャツ一枚ですごす人もいる。逆に夏は日が長くてさわやかに暖かい。日光を浴びた木々の緑が大変美しく、人々は夜十時過ぎに日が暮れるまで外にいて、がやがやとビールを飲んでいたりする。夏と冬の境目もいい。春は新緑がまぶしいし、秋は紅葉が実に美しい。人々はこの「四季」を誇りに思っている。日本人だというと、「日本にも四季があるんだって？」という話になって、それだけで親しみを持って接してくれる。もっとも、人々はシャイで、困っていたら片言の英語で助けてくれるものの、基本的に外国人に対する接し方も視線もクールだ。つまり、お節介はやかないし、むやみに話しかけたり、じろじろ見たり

HEL SING IN KAUPUNGIN TAIDEMUSEO MELAHITI

しない。街に東洋人はほとんどおらず、日本人が一人で歩いていると目立つと思ふのだが。市の人口は約五十万だそう。しかし町の中心部自体はあまり大きくなく、そんなに人がいるように見えない。車で少し走ればすぐに「森と湖の国」を実感でき、春から秋にかけてキノコ狩りを楽しめる森に囲まれた湖畔には小さな別荘とサウナ小屋が点在するのである。ガイドブックによるとヘルシンキ近郊には大小合わせて六十二のミュージアムがある。国立博物館、ふたつの国立美術館、国立近代美術館が代表格だ。市立美術館はこれら国立勢に対して、たぶん新興勢力である。今、フィンランドの国よりもヘルシンキの方が元気があつて、美術館業界でもそうなのだと市美の館長さんが言っていた。市美はギャラリーを三つ持っている。ひとつは町中のバス・ステーションの近く。テニス・パレスと呼んでいて、屋内テニス場を改造して、半分を映画館、半分を美術館にした建物だ。近年オープンしたばかりなのだが、若者が映画を観るために自動的に集まるし、企画展も三つ同時に催している、すでにかなりの入館者数があつたという。町中にはさらに地元芸術家たちのためのギャラリーもある。24番のバスで郊外へ二十分ほど行つて終点で降り、少し歩いたところにもうひとつ市立美術館の建物がある。海辺の公園の中にあつて、夏は緑が、秋は紅葉がきれいだ。メイラーティ(Melartti)の市立美術館と呼ぶこの建物は、二十年余り前の建物で、市美の基本コレクションを

HEL SING FORS STADS KONST MUSEUM MELJANS

収蔵し、企画展や常設展を行う。ところが驚いたことにタクシーに乗って「メイラーティの市立美術館」といっても、まづ通じない。発音が悪いせいもあるけれども、「セウラ・サーリ(古い木造建築をフィンランド各地から移築・保存している鳥)のそば」だとか、「Tammimientie」という美術館の住所を言つて初めて「あれか!」となる。テニス・パレスだつて新しいので地図に載つていないことが多し、市美はまだ観光スポットとして市民に十分認識されていないのだ。そんな静かで美しい環境にあるメイラーティの市立美術館で「Zen-Master Sesshu and His Followers」展が開かれた。緑豊かな晩夏八月二十三日に始まり、紅葉の盛り十月始めに展示品を全部とりかえ、雪が待ち遠しい初冬十一月十二日に閉会した。この十二週間で一・七万人の観客を集めた。市美によれば大成功で、背景人口を考えても、これは多かつたといえる。展覧会は雪舟三点を含む当館所蔵の雪舟系・雲谷派作品のほぼ全てと、雲谷派寄託品の一部、それに外部から借用した雲谷派四点を加えた全七十一一点から成つていた。全室にガラス張りのケースをつくり、シンプルながらほとんど神秘的というべきような、美しい会場になった。さすがはデザイン先進国である。図録はハードカバーで、絵本のように。好評ではば売り切れたと聞いた。これまでどこにもなかった図版のオンパレードで、世界の雲谷派研究者(数えるほどしかないが)垂涎の書になるだろ

HEL SINKI CITY ART MUSEUM MELAHITI

う。いろいろ間違ひもあるけれども、まづは満足な出来だ。デザイナーも編集担当者もよくやってくれたと思う。保存修復担当者たちは、展示空間の温湿度や照度を完璧にこちらの希望値に保つてくれたし、輸送中の安全確認も頑固なまでにやってくれた。お陰で全作品無事、帰つて来ることができた。総じて実に気持ちよく仕事ができた。業務別に細分化されたスタッフはみんな専門家で、知識も経験も十分なのだけれども、まづはこちらの意見を尊重して進めてくれるし、無駄なこと、無茶なことは一切やらないので、安心である。なぜヘルシンキだったのか。友好都市関係などの「わかりやすい」理由はない。まず、ヘルシンキが市政四五〇周年を迎え、「ヨーロッパ文化首都」のひとつに指定されて様々な文化行事を催したこと。大小さまざまな企画が毎日、市のどこかで繰り広げられたのである。日本からは雪舟展以外にも、たくさんイベントが送り込まれた。正月の花火を口火に、日本の現代作家がヘルシンキ中央駅の操車場跡に巨大なインスタレーションを作つたし、日本の大学の先生などが集つて「Next Year」という国際シンポジウムを開いた。仙台の七夕飾りを飾つて七夕ワークショップをひらいたし、茨城県東通村の子供たちが能舞を披露した。また、松江の田部美術館から出品された現代茶陶の展覧会が雪舟展に併設され、市美の横に仮設テントをはつて、関係者の方々が茶会を催し、見学者に抹茶を振る舞つた。



展示会のポスター(左)と図録(右)。フィンランド語、スウェーデン語、英語の三カ国語表記だ。



Meilahtiの市立美術館外観。公園の中にあり、木々に囲まれている。背後は海辺の遊歩道。(撮影筆者、以下同)



オープニング・セレモニー時の正面玄関。開会式には日本大使、副市長をはじめ、約600人の招待客がおしかけた。



会場風景。正直ここまで格好良くなるとは思わなかった。灯明の下で見ているような雰囲気、まさに神秘的。

大変な苦勞をしてこれらの日本関係イベントをまとめたのが「ヘルシンキ2000日本委員会」で、その事務局長が山口県出身なのである。この方は日本でフィンランドの絵本展を開くなど、以前からフィンランドとつき合いがあった。ヘルシンキ市美から相談があったとき、真先に雪舟を思いついたという。

市美曰く、「日本の現代美術については紹介される機会も少なくないので知っている。しかし、そのルーツとなる古文化についてはほとんど無知である。これは文化紹介の形態として不幸なことであり、フィンランド初の日本古美術展をぜひヘルシンキ市美でやってみよう。」

一方、山口県としては、雪舟をもっと世界に向けて発信していきたいし、雲谷派まで含めればほぼ単独で展示会を成立させるだけのコレクションはある。雑誌レベルでそういう夢があった。

これらの思いがひとつになった。最後

ZEN - MESTARI SESHU JA HÄNEN SEURAAJANS

今回の展示会を国がやっていけば「日本古美術名品展」はできたと思う。それはそれでいい。しかしそれは地方の美術を無視するだろう。現状では、雪舟はともかく雲谷派はほとんど出る幕がないことが予想される。

けれども雲谷派も結構、見応えはあることが今回わかった。金屏風は予想通りの人気ぶり。等顔・等益の複雑重厚な作品よりも等瑤のあっさりした画面の方が人気があったのは意外だったけれども。地方美術といえども、日本文化について

ZEN - MÄSTAREN SESHU OCH HANS EFTERFÖLJARE

て考えるきっかけを与える力は十分に持っている。しかも欧米には雪舟末流として、たくさん雲谷派作品が流出して蔵の中に眠っている。それらは山口県による価値付けを待っている。だから、地方美術だからといって恥ずかしがらずに、堂々と紹介してみることが重要だ。

日本での宣伝が不十分だったことなど、反省点はもちろんある。正直、山口県美の三点だけで雪舟の魅力を伝えることは不可能だし、そういう状況下で雲谷派のおもしろさを伝えることも十分できなかったような気がする。といっても、背伸びして意味不明な説明をするのはイヤで、講演会では観念して、モノに即して(見ればわかるように)、淡々と説明した。それなりにできてくれたように感じたが、どこまで通じたのか。地方の美術といえども、外国の人にもわかるように、たまには説明の仕方考えた方がいいということを学んだ。

ZEN - MASTER SESHU AND HIS FOLLOWERS

それから、雪舟のことを紹介した英語文献の少なさと、古さが気になった。ヘルシンキの人々は「大自然に学んだ雪舟」というひと昔前の雪舟観と、現実に目の前にある空想的な山水画との間のギャップに苦しんだはずだ。

雪舟を日本を代表する画家だと誇るのなら、日本人は外国の人にもわかるようにその良さを説明しなければならぬだろうし、それができないなら、雪舟に日本代表を降りてもらおうしかない。雪舟の絵のおもしろさを外国の人にもわかるように二カ国語で説明した本。雪舟の五百年遠忌も近い。もうそろそろ、そんな本が出てもいい時期だと思ふ。それを山口から発信できれば、なおい。

もう紙面が詰まった。展示会が終わっても問題山積。ひよんなことがきっかけのヘルシンキ市美とのこの交流事業もまだ始まったばかりなのである。

(綿田稔 当館学芸員)

●平成十一・十二年度の新収蔵品●

芙蓉図	曾我二直庵	江戸初期	紙本彩色・掛幅装
西湖・金山寺図	雲谷等珠	江戸中期	紙本墨画淡彩・六曲屏風一双
士農工商図	狩野芳崖	明治初期	紙本墨画淡彩・掛幅装(四幅)
UFO	松井紫朗	一九八六	真鍮・アルミ・大理石
All by Myself	Nan Goldin	一九五三〜九八	スライド・音楽
人間の交換	Jörg Geismar	二〇〇〇	写真・綿・木枠・ガラス
接合箱「紡」	山本晃	一九九七	銀・銅・金
萩面取花入	三輪榮造	一九九二	陶
萩壺	三輪榮造	一九九八	陶
萩掛分茶碗	三輪榮造	一九九九	陶
萩茶碗	三輪榮造	一九九九	陶
萩茶碗	三輪榮造	一九九九	陶
萩茶碗	三輪榮造	一九九九	陶
萩灰被水指	三輪榮造	一九九九	陶
果物	小林和作	一九三二	油彩・カンヴァス
「萩の日々」	下瀬信雄	一九八七〜九八	ゼランチン・シルヴァー・プリント(24枚)
彩箱	加藤重美	一九九八	陶
黒地金銀彩水指	三輪榮造	一九九八	陶

(以上四件、購入作品)

(以上四件、寄贈作品)

小林源太郎関係資料 (結城正明「狩野芳崖像」・伊東深水「小林源太郎像」ほか)
 雲谷派
 雲谷派
 江戸末期
 マクリ(屏風残欠)
 雪舟筆山水小巻模写 山岡山泉 一九三〇 紙本淡彩・卷子装
 雪舟筆山水長巻模写 山岡山泉 一九三二 紙本淡彩・卷子装

* 山水長巻模写は常設展「明治・大正の日本画」にて特別展示する予定です。

(以上四件、寄贈資料)

美術館から

これからの特別展

陰翳礼讃 フランスの現代写真

ジャンクロード・ルマニーの視点

一月九日〜二月二十八日

*三〜七頁参照

山口県立大学卒業制作展

二月八日〜二月十一日

山口大学卒業制作展

二月十五日〜二月十八日

山口芸術短期大学卒業制作展

二月二十二日〜二月二十五日

これからの常設展

●絵画展示室(香月泰男室)

シベリア・シリーズ(3)

一月十六日〜四月十五日

●絵画展示室(小林和作室)

小林和作展

一月十六日〜四月十五日

●郷土工芸室

植木茂展

一月十六日〜四月十五日

●資料展示室

田村彰英展

一月十六日〜二月二十五日

深瀬昌久展

二月二十七日〜四月十五日

●第二常設展示室

明治・大正の日本画

二月六日〜四月十五日

■開館時間

午前九時〜午後五時

(入館は午後四時三十分まで)

■休館日

月曜日(月曜日が祝日もしくは振替休日の場合は翌日休館)と年末年始(十二月二十八日〜一月三日)
 * 臨時休館等にご留意ください。

■美術館案内

NTTハローダイヤル(〇八三一九二二八六〇〇)をご利用下さい。

URL: www.pref.yamaguchi.jp/4yamaart.htm

山口県立美術館ニュース

「天花」 第七十九号

平成十三年一月十五日発行

発行 山口県立美術館

〒753-0089 山口市亀山町三、一

TEL 〇八三・九二五・七七七八

FAX 〇八三・九二五・七七九〇

印刷 隣報社写真印刷株式会社